探偵小説と諷刺錦絵と『リア王』

――条野伝平『三人令嬢』――

Detective Stories, *Nishiki-e* Caricatures, and *King Lear*: Jono Denpei's *Sannin Musume* (*Three Daughters*)

近藤弘幸

要旨

条野伝平は、今ではほぼ忘れられた作家であるが、幕末には山々亭有人の号で人情本の作者として人気を博していた。明治維新後の条野は、一旦創作活動から手を引き、新興の新聞界に身を転じる。彼が『東京日日新聞』を経て一八八六年に創刊した『やまと新聞』は、連載小説を売りにする典型的な小新聞として大成功をおさめた。同紙では条野自身も採菊散人の号で創作活動を再開し、ふたつのシェイクスピア物を残している。本論は、そのうちのひとつである『三人令嬢』（一八九〇）と題された『リア王』を読み解く試みである。幕末・維新の動乱期を経て新聞界へ転身する条野の生涯を素描したうえで、『三人令嬢』の概要を紹介し、同作が、探偵小説という当時の最先端の流行を取り入れて新しい読者への訴求を図りつつ、戊辰戦争期の諷刺錦絵的手法を援用して旧幕以来の古い読者のノスタルジーにも応える、したたかで豊かなテクストであることを明らかにする。

キーワード
シェイクスピア、日本、明治、翻訳、翻案

はじめに

一八九〇年（明治二三年）七月二九日、三遊亭円朝の高座の速記連載があたり、当時東京で一、二を争う発行部数を誇っていた『やまと新聞』紙上に、次のような告知が掲載された。

○三人令嬢

眠氣の爲めに久しく筆硯に據ざりし採菊散人も早く出ぬかと讀者の御催促頻りなるに圖らざりき一筆庵も病ひに由つて小説に從事する能わざれバ明日の紙上より題號の如き小説を強て散人に筆を採らせ續々貴覧に呈し候間だ相替らず御愛讀の程伏て奉冀上候[1]

『三人令嬢』は、予告どおり翌日から九月二五日まで、全四九回にわたって『やまと新聞』紙上に連載されたあと、一二月二六日には鈴木金輔によって単行本として出版される[2]。新聞連載、単行本のいずれにおいても、それがシェイクスピア物であることや、そもそも翻案であることは触れられていないが、一読すればそれが『リア王』に基づくものであることは明らかである。

本論は、このあまり知られていない明治の『リア王』翻案を、当時の歴史的文脈において読み解く試みである。作者の採菊散人こと条野伝平は、江戸時代には山々亭有人の号で人情本『春色江戸紫』などを著して人気を博し、維新後は新興の新聞界で大成功を収めたが、今ではほぼ忘れられた存在となっている。そこで本論ではまず、幕末・維新の動乱期を経て新聞界へ転身する条野の生涯を素描する。次に『三人令嬢』の概要を紹介し、明治の新聞における探偵小説の流行、および条野自身も親しんだと思われる戊辰戦争期の諷刺錦絵というふたつを手がかりに、この奇妙なシェイクスピア翻案を読み解く。坪内逍遥以来の正統なシェイクスピア研究において完全に無視されてきたテクストの、思いがけない豊饒さを明らかにすることが、本論の目論見である。

一　粋狂連から日報社へ――条野伝平略伝①

旧幕時代の条野伝平は、戯作者の仮名垣魯文や落語家の三遊亭円朝、浮世絵師の落合芳幾などとともに、有力商人の庇護のもと、粋狂連という遊興集団を形成していた。[3] このグループは、聴衆から集めた三つの題で即興の落語を演じる三題噺の流行をもたらし、興画合せという判じ絵遊びを生み出した。興画合せとは、次のようなものである。

> 此遊びハ先づ會日を定め其前に兼題を配り置きて當日其趣向を持寄り衆議判にて之が優劣を定め高點の部へハ夫々賞品を配るといふ方法なりき其興畫の認め方ハ兼題の品物を畫中にあらはさず故事又ハ古歌等の意を取り他の景物を描き出して夫となく兼題を利かする趣向にて例へバ寄月水といふ兼題の出たる時は薄の原と富士の

遠見（とほみ）のみを畫きて武藏野と見せ月と逃水（にげみづ）とを隠して夫となく兼題を利かせ又養在深閨人未識といふ詩の句を兼題に取りし時ハ室咲（むろざき）の梅を描きて餘意を示すがごとき趣向（しゅかう）なり、[4]

こうした粋人としての条野の優雅な生活は、動乱の時代を迎え、その根底から揺さぶられることとなる。

徳川慶喜の大政奉還によって倒幕の大義名分を失った薩摩藩は、旧幕府側を刺激して武力衝突の口実を作り出そうと、江戸市中でテロ行為を繰り返した。さらに江戸に入った東征軍（新政府軍）は、「軍とは名ばかりで、そのほとんどが、ただの無法者」であり、「官軍であることをかさに、私利を私欲で追い求めた」[5]。彰義隊が敗北して庶民に愛された「上野のお山」が焦土と化し[6]、江戸が東京となって慶応が明治に改元されたあとも、人々の生活は脅かされ続ける。徳川家が静岡移封となり、参勤交代の義務が消滅した諸大名がいなくなったことで、幕末には一〇〇万人を超えていた総人口が、およそ六七万人に激減したのである[7]。これは「町方の商業、運輸、手工業の落ち込み、そして窮民（物貰い）の大量発生」を引き起こした[8]。その荒廃は、一八六九年六月六日（明治二年四月二六日）付の岩倉具視宛書簡で、大久保利通がこう認めざるを得ないほどのものであった。

皇國危急存亡ノ秋切迫スルコト間不容髪抑昨年來兵亂漸平一時無事ノ形ヲ成トいえとも大小牧伯各狐疑を抱き天下人心洶々然として其亂るゝこと百萬之兵戈動くより可恐して今日を平安ト心得候ハ床下之烈火燃出さゝるを幸とするニ異ならす豈可不思乎々々々々東下後實地之情態厚見聞仕候處英公使要路之人を耻しめ兒童ノ如愚弄し草奔士ハ政府を凌辱して奴輩之如蔑視し内外之侮慢至らさる所なし況乎天下人心政府を不信怨嗟之聲路傍

ニ喧々眞ニ武家之舊政を慕ふニ至る[9]

このような環境の激変が、条野のパトロンや彼自身の境遇に大きな影響を与えたことに疑う余地はない。

こうした東征軍のふるまいや治安の悪化を背景に、幕末・維新期、とりわけ戊辰戦争期の江戸・東京では、新政府や、新政府側に寝返った旧幕勢力を揶揄する、大量の諷刺文芸が生み出された[10]。そのひとつが、「当世三筋のたのしみ」などに代表される、着物の模様など、画面に散りばめられた視覚的記号の高度な読み解きを必要とする、諷刺錦絵である[11]。かつて平和な頃に興画合せを楽しんでいた条野は、それらの作品に共感していたものと思われる。もしかしたら、なんらかの形でその制作にもかかわっていたのかもしれない。

しかし時代の変化には抗えない。箱館戦争に勝利し、廃藩置県を断行して中央集権体制を整備した新政府は、一八七二年六月三日（明治五年四月二八日）、国民の創出・教化の基本方針である三条教則を発布する。条野は、仮名垣魯文とともにいわゆる「著作道書キ上ゲ」を新政府に提出し、「尓後従来ノ作風ヲ一變シ乍」恐教則三條ノ御趣旨ニモトツキ著作可」仕ト商議決定仕候」と報告する[12]。これは、事実上の「戯作者としての廃業宣言」であった[13]。実際、条野は、上申書提出前にすでに戯作の世界からは手を引き、語学書などの実用啓蒙書を執筆して糊口をしのいでいた[14]。さらに彼は、新興の新聞界にその活躍の場を見出していくことになる。

条野と新聞のかかわりは、戊辰戦争期にさかのぼる。「戊辰の變に際し〔……〕非恭順論者の一人にて維新の王師に反對するの念を」抱いた旧幕臣、福地源一郎は、「竊に條野傳平廣岡幸助西田傳助の三人に謀り乃ち四月上旬を以て新に江湖新聞と名けたるを發兌刊行」する[15]。広岡幸助と西田伝助も、粋狂連のメンバーだった[16]。同紙が、「着々維

新の政に反對したる而已ならず紙上は自から幕府の脱兵等が勝を喜びて之を稱賛し甚しきは戰報の空説若くは政況の虚聞を作爲して以て記載」した結果、福地は逮捕される。[17] 福地の釈放に「最も奔走したのは江湖新聞發行に關係した一人である條野傳平であると傳へられてゐる」――

彼は最初本郷の伊豆藏（いづくら）といふ呉服屋の番頭をしてゐたが、呉服物を背負うて歩くうちにも讀書を怠らず、それに記憶が非常によかつたので、そのうちに戯作に筆をとるやうになつたものらしい。そして福地とも交り、また福地の知人でもあつた杉浦譲といふ幕臣出身の人とも相知る仲であつたのである。この杉浦はその頃新政府に出仕してゐたものと見え、その人の仲介によつて木戸孝允を動かして助命運動をしたのだといふことである。[18]

後述するように、のちの福地は政府擁護に転じるが、「彼の政論はすべて木戸の意見であるとまでいはるゝやうになった因縁は、おそらく此處に深い根をおろしたのであらう」。[19]

かくして条野伝平の新聞とのかかわりは、日本近代ジャーナリズム最初の筆禍事件として、一旦幕を閉じた。しかし一八七二年二月一六日（明治五年一月八日）、条野は、西田伝助および落合芳幾とともに、あらためて政府に新聞の刊行許可を願い出る。[20] こうして一八七二年三月二九日（明治五年二月二一日）に第一号が刊行されたのが、『東京日日新聞』（現在の『毎日新聞』）である。後年の西田の回顧によれば、新聞刊行を言い出したのは条野であり、それを勧めたのは、筆禍事件で世話になった杉浦譲だった。話は前年の一〇月にさかのぼる。

條野がいふには、此間杉浦さんの所へ行つた時（此の杉浦さんといふは其頃太政官の權大内史を勤めて居られました杉浦讓君屋敷は下谷五軒町にありました）稍々の話から佛蘭西では新聞を賣るのに浮床といふものがあつて、夫で爺さんとか婆さんとかゞ賣て居る、日本でもあれをやつたら賣れるだらうと話されたといふのが抑も日々新聞發行の始めなんです、

当初、発行元・日報社の本局は「少し曲り掛つて丸太で突かい棒のしてある」条野の自宅に置かれた[21]。

一八七四年（明治七年）一月に提出された「民撰議院設立建白書」を契機に自由民権運動が本格化すると、日報社は福地源一郎を招聘する。福地は次のように述懐している。

東京日々新聞の創立者は條野西田藤岡の諸人にて即ち七年前に余と倶に江湖新聞に從事したる輩なりければ往日の縁故あるを以て此諸人が切に勸告せるに從ひ此の新聞社に入り執筆することを約して社長となり遂に明治七年十二月一日を以て紙面を擴張し躰裁を改良し社説の一欄を設けて余が意見を世上に發表する事とは成りたりき[22]

『郵便報知新聞』『朝野新聞』『曙新聞』が国会の早期開設を主張して「民権新聞」と呼ばれたのに対し、福地は政府擁護に転じ、「太政官記事御用」を掲げた。こうして『東京日日新聞』は、「社説を掲げて政治を論」じ「卑俗の記事は新聞の品位を堕すものとして掲載せざ」る[23]、いわゆる大新聞としての道を歩むことになる。

二　『やまと新聞』創刊と作家復帰――条野伝平略伝②

福地源一郎が『東京日日新聞』を大新聞化するのと前後して、条野伝平は、同紙のこれまでの雑報記事――「卑俗の記事」――から、とりわけ人々の好奇心を満たしそうなものを選び出し、錦絵に仕立てる企画を始める。錦絵版『東京日々新聞』である。[24]『東京日日新聞大錦』と銘打たれた刊行予告は、「多端により。壬申已来揮毫を断ち。妙手を廃し」落合芳幾が再び筆を採り、「往昔に弥増す巧の丹青。写真に逼る花走の。新圖」が掲載されることを謳っている。[25]この錦絵版『東京日々新聞』は、芳幾の錦絵に、条野や転々堂主人こと高畠藍泉などの文章を添えて発行され、評判を呼んだ。その最盛期は一八七四年（明治七年）一〇月で、一九点の刊行が確認されているが、一八七五年（明治八年）四月には芳幾、藍泉が小新聞『平仮名絵入新聞』を創刊してそちらに軸足を移し、同年八月頃には錦絵版『東京日々新聞』は刊行を停止した。[26]

条野が『平仮名絵入新聞』に関与した形跡はないが、『東京日日新聞』の大新聞化とともに、同紙での条野や西田の居場所はなくなっていったものと思われる。すでに本局を銀座に移転し、「表つきはまるでお役所みたいな、一枚繪にも出て御承知でせうが、立派な石蔵の二層樓で、堂々たるもの」[27]となっていた日報社の中心には福地源一郎がおり、一時期同社に在籍していた末松謙澄のような政府要人が出入りしていた。それに対し、

こちらは軟派の親玉が條野傳平さんで、古くは山々亭有人といひ、其頃は採菊と號してゐた。廣岡柳香、塚原

澁柿、南新二、宮崎三昧、會計には西田傳助、正面の左側に、椅子が並んでゐました。繪の方が落合芳幾でした。コノ對照が面白ひといひませうか、奇態といひませうか、彼方は政治家の鏘々たる人物本位の連中で、政府の爲め御用を勤めて、天下に呼號してゐる。獅子吼してゐるのに、こつちは寄ると障ると軟かい方で、茶番俳諧、遊興猥談、小説をかくといつた手合、兩雄相立たなくなつたが、條野氏を始め西田氏、芳幾畫伯は、創業の功勞者だから、とう〳〵此等の人々へ、功勞金を出して、御用紙は御用紙で、大新聞の體面でやつて行くこととなつたらしい。

『東京日日新聞』を去った条野らは、「其頃警視廳の筋を引いてゐた繪入新聞〔＝『警察新報』〕を、『やまと新聞』と改題して、新陣容をとゝのへ、軟派新聞を發行することに」[28]なり、一八八六年（明治一九年）一〇月七日にその第一号が刊行された。

『やまと新聞』創刊号には、条野の筆になるものと思われる論説が掲載されている。そこで条野は、「艶種と稱するもの」を中心に報道し、「續き物と稱する小説を連載」する小新聞[29]としての同紙のアイデンティティを、次のように規定する。

されバ本紙を讀む諸君ハ此より毎號に載る。放蕩治郎の情痴談。凶漢悪婦の曲物語。新聞續話に論なく内外百般の記事を見て。善に就き悪を避け利を取り損を去て玉へ俚諺にも云ふ人の振見て我振直せと。古へにハ演劇をもて無筆の早學問。勸善懲悪の仕方話と名づけたり。我輩ハ新聞紙をもて智慧の指南車。取利避害の早講談

と云ハんとす[30]

篠田鉱造は、同紙を「小新聞の典型を具備した理想的の新聞紙で、小新聞の完成したものと謂つてもよい」と評価している[31]。

この企ては見事に当たり、『やまと新聞』は、「創刊まもなく一万部に達し、創刊翌年の二十（一八八七）年には号当り平均で約一万六千部、明治二十二（一八八九）年頭には二万を超え、東京で発行される新聞のトップに躍り出」る。その人気の原動力になったのが、連載小説であった。「『やまと新聞』の成功は、連載読み物の面白さこそ読者をつなぎ止める最大の要素であると新聞界に認識させた」のである[32]。創刊号では、渋柿園主人こと塚原靖の『何事も金づく欲情新話』、三遊亭円朝の高座を小相英太郎が速記した『侠骨今に香く賊膳猶ほ腥し松の操美人の生埋』の連載が始まっている。同時に条野も採菊散人の号で『廓雀小稲の出来秋』を寄せ、旺盛な創作活動を再開することとなる。

採菊散人として文壇に復帰した条野伝平であるが、『やまと新聞』に彼が発表した作品には、かなりの数の西洋種の翻案が含まれていた[33]。同時代の吉田香雨は、彼のことを次のように評している。

散人の小説は老練なり其翻訳的の味なきものを鰹魚と味淋で煮ころばして甘く人に喰せる手際なか〳〵に感ずべし夫もその筈散人は以前山々亭有人と稱し昔把つたる筆柄の力あまりて近頃も續々新作を物さるゝ由あゝ散人が舊友たる藍泉氏は早既に世を去りぬ魯文翁は世にあるも今は著述の業絶えたり獨り散人の壯なる維新前より

引續きて今尚ほ瞿鑠たる健筆を明治の文界に揮はるゝは最ありがたき名人といふべし[34]

こうして「翻訳的の味なきものを鰹魚と味淋で煮ころばして甘く人に喰せ」た作品群のなかには、ふたつのシェイクスピア物が含まれていた。ひとつは、『オセロー』の翻案である『花の深山木』、そしてもうひとつが本論で取り上げる『三人令嬢』である。

三　『三人令嬢』

『花の深山木』は、『やまと新聞』連載時にはそれがシェイクスピア物であることを明示していないが、『痘痕伝七郎』と改題して出版された単行本では、「西哲の著述に係るオロセー（ママ）と云ふ有名の小説にて、黒人の軍人に白人の令嬢が想を懸けて遂に夫婦と成るといふ、一大傑作なるを猥に飜案」したものであることを明かしている[35]。これに対し、『三人令嬢』のシェイクスピア起源は、新聞連載、単行本のいずれにおいても語られることはない。しかし本論冒頭で指摘したように、一読すれば、それが『リア王』に基づくものであることは明らかである。さらにその叙述展開からみて、シェイクスピアの戯曲ではなく、ラム姉弟の『シェイクスピア物語』を種本とするものであると考えて間違いないだろう[36]。

第一節で述べたとおり、維新直後の条野は実用書の執筆で生計を立てていた。彼が著した語学書は、漢語にかかわるものがほとんどだが、英語に関するもの（『童解英語図絵』『流行 英語都々逸』）も含まれている[37]。しかしこれらは

いずれも入門的な単語集の域を出るものではなく、条野にラムを読めるだけの英語力があったとは思えない。条野の実子で日本画家の鏑木清方は、次のように証言している。

落語家では圓朝と親密にして櫻痴さんが飜譯して夫を父が潤色して圓朝に話して聞かせて續物の種にした事がいくらもあつた様です夫から大和新聞の小説は大抵櫻痴先生が飜譯して父が潤色したものでした何でも今考へますと「オセロ」なども飜案された事がある様です[38]

『三人令嬢』もまた、福地源一郎が翻訳提供者だったと考えていいだろう。[39]

『三人令嬢』は、ラムを種本とするものであるものの、むしろそれを梗概とし、自由に膨らませたもの――条野自身の言葉を借りれば、「猥りに飜案」したもの――と言った方が正確である。土谷桃子が指摘するように、「元ネタだけは他から得て作品化に際しては自由に潤色するという手法は、幕末江戸粋興人グループ内での常套手段であり慣れたものだった」[40]。ラムの「リア王」は、次のように始まる。

Lear, king of Britain, had three daughters: Goneril, wife to the duke of Albany; Regan, wife to the duke of Cornwall; and Cordelia, a young maid, for whose love the king of France and duke of Burgundy were joint suitors, and were at this time making stay for that purpose in the court of Lear.[41]

条野は、舞台を同時代の東京に移し、登場人物にはるかに具体的で詳細な造形を施している。リアにあたるのは水島隆茂伯爵、「以前は西國にて二十有餘萬石を知行し官は從四位左近衛の少將にて在はし維新の際抜群の軍功ありとて賞典禄若干を賜」わった華族である。[42] 一〇年以上前に妻を亡くした隆茂には、瑠璃子、佐代子、幸子という三人の娘がいる。

> 姉の瑠璃子は同じ水島を名乗れる茂樹と言るを婿と爲し茂樹は職を裁判官に奉じ別居して神田猿樂町に居次女の佐代子は同族小宮子爵の許へ嫁し家に残れるは三女の幸子なり三孃の中にても幸子は容貌の美なる心ばえの優しき二姉に優る事數等なりさればにや吉見武雄といふ陸軍の中將又同族にて宮内省に奉職せらるゝ間宮子爵の兩氏は或る高等官の園遊會に幸子を見やりて懸想爲し其熱度は華氏の百度以上に昇りたり[43]

間宮は、幸子の父、隆茂に取り入るため、その茶道の弟子となる。吉見もまた、小栗宗入という茶人の仲介で隆茂に弟子入りする。

小栗宗入は、「茶道の巧者のみならず大の滑稽家にして伯の氣の結ぼれたらん時は例も洒落の語を吐て鬱氣を散ぜしむる事屢々あり謂を以て伯も又二無き者に思さるゝ」[44]と紹介されており、ラムの 'this poor fool clung to Lear after he had given away his crown, and by his witty saying would keep up his good humour'[45]という道化の描写に基づいて造形された登場人物であると思われる。ラムの叙述では、道化が登場するのはゴネリルによるリア冷遇が語られたあとであり、道化が物語展開に寄与することはない。これに対し、パトロンの庇護を受けた粋人という点に旧幕時代

の自分自身と似たものを感じたのか、条野は、ラム版を大きく逸脱し、この滑稽家に吉見と幸子の結婚を成立させるトリックスターとしての役割を与えている。愛情テストと財産分与、その後の遠藤保の諫言と追放のあと、宗入が「御媒介」[46]となることで、吉見と幸子の結婚話がまとまる。そこに瑠璃子の横槍が入って事態は紛糾するが、宗入の機転で話が収まるのである。こうして吉見と幸子はめでたく仮祝言を挙げ、吉見の任地である大坂に旅立つ。ここまでに条野は連載の第一三回まで、全体の四分の一以上を割いている。

その後、さまざまな小さな逸脱をはらみつつ、物語は大枠でラム版に沿って進行する。事態を吉見に知らせる宗入の手紙によれば――ここでも宗入が活躍する[47]――以下のような展開である。

> 其大要を揚れば二孃が伯爵に對する浮薄の爲体より附從者の減員賄ひ料の減少食料の粗惡なる其他の待遇は恰も厄介の食客を扱ふに異ならずとの顛末より遠藤保に一日淺草にて出會し二孃の伯爵に於る不禮の光景を語りたること彼が官階の要地を辭し馬丁となりて住込し事より突然暇と成し事伯爵が暴雨を冒て駈出し今は保が家に逗留爲居る事[48]

この知らせを受けて、幸子は慌ただしく帰京する。

ラム版では、リアとコーディリアが再会したあと、語り手の 'Let us return to say a word or two about those cruel daughters'[49]という言葉とともに、ゴネリルおよびリーガンとエドマンドの不倫関係とその顛末――コーンウォール公の死、ゴネリルによるリーガン毒殺と自殺――が、一パラグラフで手短に語られる。条野は、ここでまたラム版

を大きく逸脱し、連載第三七回から最終回まで、やはり全体の四分の一以上の紙幅を割いてそれを描く。

エドマンドに相当するのは、片山冬三という、「或る省の高等官」を「會計上に不整頓」があったために免職になった男である。彼は「顔の奇麗なるに引變へ根生は頗ぶる穢なく」、もともと「某の藩の留守居役を勤めし者の三男なるが次男は世を早くし長男は丁百に足らぬ性なるを以て老年の母を誤魔樫父の遺言と號して廢嫡を爲し自から家督となり父が貯へ金を使用して紳士社會に立交はる横着者」である。[50] 片山は、佐代子、瑠璃子と相次いで関係を結ぶ。

その後、佐代子は夫の義直を卒中で亡くし、[51] 片山と再婚することになる。それを知った瑠璃子は、侍女の牧江と謀り、佐代子毒殺の計画を立てる。牧江は、姪のお北を脅迫し、佐代子の食事に、侍医の玄瑞に調合させた毒を混入させ、首尾よく佐代子を殺害する。後日瑠璃子は、夫の茂樹をも亡きものにしようと、牧江に命じて食事の椀物に毒を混ぜさせる。ところがその日、遅れて帰京した吉見が、今後の隆茂の処遇を話し合うために、遠藤を伴って来訪し、茂樹とともに食事をしていくことになる。

思わぬ事態に瑠璃子と牧江は動転するが、「毒食はば皿だ」[52] と腹をくくり、三人まとめて殺す決心を固める。ところが、「遠藤は性來豆腐を好まざれば此椀に箸を附けず吉見は大の酒好きにて酒を過せし時は例も飯を用ひざる程なれば始より椀の蓋を明ねど茂樹は熱い物が好なれば冷ぬ中にと椀中を悉く盡し尚緒口の取遣を爲せる中茂樹は胸先が痛むとて頻りに苦しめる体」となり、中座する。[53] 吉見はのどの渇きを覚えて椀に手を伸ばすが、誤ってそれを取り落としてしまう。すると「這は如何に春の待受けにとて昨今敷替たる青疊が忽ち色を變じ」、[54] 吉見は毒物の混入を疑う。吉見と遠藤は、茂樹・瑠璃子家中で信頼できる人物として、菅沼吉弥という遠藤の「竹馬の友で怜悧抔とい

ふ方ではござらんが如何にも信實な男」を選び、疑念を伝えて去る。その夜、茂樹は息を引き取る。

菅沼吉彌は佐代子が俄然死したる事に就て探偵を試みたるに佐代子は良人義直が存在中より片山冬三に通じ居たる事を探り得義直が病死の始末を醫者に就て取調べたるに全く劇烈の卒中風にて別に怪しむべき事もなし依つて尚ほ佐代子が病死の爲体くを探るに敢て怪しと認むる程の徴候もあらねど中毒たる事は覆ふべからざる事實の如し尚ほ小宮家へ附人として赴むきたる老女竹川に青山の墓地にて出會すべき約束を爲し佐代子が死に就きし當時の爲体を聞たるに疑ふべき者は牧江と其姪のお北なる事を査出し菅沼の朋友中に或方面監督を奉職爲す者ありしかば一日此事を密告せしに忽まち其方面より刑事巡査を派出せしめ件のお北を捕縛爲したり[56]

さらに牧江と玄瑞が連行され、観念した瑠璃子は自害する。

このあと、ラムが三パラグラフにわたって語るリアとコーディリアの死の顛末は、条野版ではすべてカットされ、物語はハッピー・エンディングに書き換えられる。[57] 牧江、玄瑞には死刑判決が下され、隆茂には安楽な余生が約束され、吉見が水島の家督を相続し、「禍ひ去りて芽出度春を迎ふる」[58]結末となるのである。

四　ゴネリルの奸計と毒婦物・探偵小説

『三人令嬢』の結末の改変に、勧善懲悪を是とする時代風潮の影響があったことは間違いない。一八八七年（明治

二〇年）には『女学雑誌』で、やはりラム版に基づく『リア王』の紹介が二度にわたって試みられているが、そのうちひとつは「シエクスピア理想 コルデリアの伝」と題されており、著者の関心がどこにあったかは明らかである。[59] 第二節で見たように、条野は『やまと新聞』を「智慧の指南車」と位置づけていた。『三人令嬢』単行本化にあたって添えられた序文は、「小説は教育の一端なり」と主張したうえで、同作が「教育の意をふくむ事又十分なり」とお墨つきを与えている。[60] しかしながら、条野の記述の重点は、「勧善」（手短に語られる幸福な結末）よりも「懲悪」に、さらに言うならば「悪」そのものとその「悪」が暴かれる経緯を詳細に描写することにあり、彼の改変はこうした一般論だけで説明できるものではない。

明治の新聞連載小説は、実際の事件を報道する連続記事から誕生した。そのプロセスにおいて大きな役割を果たしたのが、高橋お伝に代表される女性犯罪者たちを描いた、毒婦物と呼ばれる作品群である。そこに描かれた「毒婦たちは実録読み物が小説へと上昇する過渡期の悪のヒロインだった」。[61]「著作道書キ上ゲ」を条野とともに認めた仮名垣魯文は、『かなよみ』の連続記事として始まった鳥追いお松の事件報道を草双紙に切り替えて『鳥追阿松海上新話』として発表し、また高橋お伝を描く『高橋阿伝夜叉譚』を出版して、大成功を収めていた。

条野が関与した錦絵版『東京日々新聞』においても、何人かの毒婦が取り上げられている。高橋お伝、鳥追いお松と並んで明治三大毒婦と称される夜嵐お絹こと原田キヌは、妾の身でありながら歌舞伎役者と愛人関係になり、旦那をヒ素で毒殺して斬首された。この事件は、一八七二年三月三一日（明治五年二月二三日）の『東京日日新聞』で報じられ、一八七四年（明治七年）一〇月に錦絵新聞化される。[62] 同時期には、次のような、『三人令嬢』の瑠璃子、佐代子、片山を彷彿とさせる（上回る?）事件も錦絵新聞化されている。

熊谷縣下に。孀婦のおなつが長女のお袖。次女のお蝶三人と。輪交まくら川越の多賀町に住む滝次郎。清き流の名にも似ず放蕩無頼の悪漢なれバ。三婦に姦する故をもて親子互ひに睦まじからず。平日に葛藤の絶ざりしが。或時例の口角より母を柱に縊つけ。其面前に戯れて姉妹も亦愉快とす。醜体言語に絶たりし人畜生が挙動の。官に聴へて捕へられ。入間郡の裁判所へ一同送致たりとなん(63)

これらの錦絵新聞で文章を担当しているのは高畠藍泉であるが、条野も、瑠璃子による夫毒殺を先取りするような記事を残している。

深川西六間堀餅屋渡世菖蒲與吉と云ふ者久しく病ひの床にありしが其妻いとハ本年廿五才糸と云ふ名に背かずして染り安かる水性にて夫の甘も鼻に附きいつしか小僮鹽田兼吉と人目忍びて寐の子餅契る数さへ重ね着る夜るの衣の度重り若しも本夫の全快なさバ二人りが中の自在餅此快樂ハ遂げられまじ唯さへ枯るべき菖蒲與吉毒害なさんと膽太くも二人りは法をかきつばた薬土瓶へ配剤の毒ありしとハ此病者あやいもしらで飲むや否鼻耳口眼より血を吐て忽ち没命爲しけるを内に喜こひ表に患ひ形の如く野送りし誰れ憚りの関守も泣眞似なせしが発覚し遂に警視の支廳へ呼バれ厳しく糾問ありたるにありし次第を白状せしかバ本月九日東京裁判所へ送致せらる(64)

瑠璃子の描写は、こうした毒婦物の系譜を引くものである。

毒婦物は、海外から日本にミステリーを移植する土壌ともなった。「探偵小説の父」と称される黒岩涙香の活躍は多くの追随者を生み出し、翻案・創作ミステリーが大流行することになるが、「ミステリーが本格的に外国からもたらされる前夜、日本の読者は、日本特有の実録犯罪譚である〈毒婦もの〉を歓迎していた。それはまさに、江戸末の裁判ものから、洋物ミステリー受容への過渡期を形成していた」のである。[65]

『やまと新聞』創刊号から連載された三遊亭円朝の『松の操美人の生埋』は、輸入ミステリーの受容において大きな役割を果たした。連載開始にあたって円朝は「此ハ池の端の福地先生が口移しに教へて下すつたお咄しで、佛蘭西の侠客が節婦助けるといふ趣向。原書ハベリツド、エ、ライフ（Buried a life）といふ書名」だと述べている。[66] 原典はいまだに突き止められていないが（「Buried a life」は明らかに「Buried Alive」の誤りだろう）、江戸川乱歩がこの作品に言及して以来、円朝は、涙香以前の翻案ミステリー史にその名を刻むことになった。[67] 乱歩以前には、柳田泉も「随筆探偵小説史稿」において円朝にかなりの紙幅を割いている。乱歩は円朝の作品として、『松の操美人の生埋』とともに、お吉という悪女を描いた毒婦物『欧洲小説 黄薔薇』を挙げているが（やはり原典不詳）、柳田はこの作品について「十二分に探偵小説の素質がある」と評価する。この作品は一八八七年（明治二〇年）に『東京絵入新聞』（『平仮名絵入新聞』後継紙）に連載されたあと、金泉堂から出版されたが、「講談としては少くなくとも明治十二年から巷間に傳はつてゐた」ものであり、「涙香出現以前に於いて探偵小説趣味を鼓吹した先驅的作物の一つ」と位置づけられている。[68]

鏑木清方の「落語家では圓朝と親密にして櫻痴さんが飜譯して夫を父が潤色して圓朝に話して聞かせて續物の種にした」という発言に従えば、条野はこれらの円朝作品に、いわばドラマトゥルクとしてかかわっていたことにな

る。条野自身、円朝の追悼文のなかで、「子が新作を爲す都度其相談に預りたる事毎度ありて同胞も啻ならざる契り」と述べている。[69] 彼が『リア王』を勧善懲悪的に書き換えた背景には、毒婦物における悪の描写の伝統と、それを受けて発展し、悪が暴かれる経緯に関心を寄せた探偵小説の流行があったのである。

五　リアの厩と諷刺錦絵

毒婦物から探偵小説へ、という流れが、『三人令嬢』を読むためのひとつの文脈であるとすると、もうひとつの補助線は、第一節で言及した戊辰戦争期の諷刺錦絵である。当時の新聞連載小説には挿絵がつきもので、『三人令嬢』も、その連載には毎回、水野年方の絵が添えられていた（その一部は単行本にも再録されている）。これらの絵に諷刺錦絵的な記号は描きこまれていないが、この作品では、そうした視覚的情報においてではなく、言語情報において、諷刺錦絵的手法が援用されているのである。

隆茂が小宮家で冷遇されていることを知った遠藤は、玉吉の名で「馬丁と身をやつして小宮へ住み込み舊主の先途を見届け」[70]ることを決意する。潜入に成功した遠藤は、彼が世話すべき厩の説明を受ける。

デハ玉吉今這入つて來た御庭口から左りの方へ突當つた所が御厩で這入て右の方に居る仙臺馬二頭が御前の御馬で左りの方に四頭居るのが小宮家の馬で薩摩駒が一頭跡は奥州駒で其中の連錢栗毛が三春駒だと言つて子爵が自慢の馬だが往つて御覽じろ立髪の工合は鳥渡良が尾垂の格好は悪し和鞍で駆を追ふと可なり早足たが西洋

鞍と來ては形無しだといふ事じや[71]

隆茂の馬が仙台の馬、小宮家の馬が薩摩の馬と奥州の馬で、そのうち一頭が三春の馬、これは義直自慢の馬だが見掛け倒し――こうしたディテールは、物語展開上、まったく不要なものであるにもかかわらず、あえて書きこまれている。そこには、作者のなんらかの意図が感じられる。

薩摩については、改めて言うまでもないだろう。問題は、仙台、奥州、三春という地名である。これらの地名が想起させるのは、戊辰戦争における東北諸藩の奥羽越列藩同盟である。朝敵とされた会津藩および庄内藩の赦免嘆願を目的とする奥羽列藩同盟に端を発するこの軍事同盟には、上野戦争後の江戸庶民の願いが託されていた。

その奥羽越列藩同盟の盟主が仙台藩であり、同盟軍の東北戦争における敗北の要因のひとつとみなされていたのが、三春藩の裏切りである。『仙台戊辰史』は、「三春ノ反盟」を次のように伝えている。

七月十六日仙臺藩鹽森主税ハ棚倉城ヲ恢復セントシ三春、二本松、會津棚倉ノ兵ヲ併セ石川郡淺川古舘山ヨリ兵ヲ進メ淺川ノ渡ヲ隔テ、射撃ス西軍〔＝新政府軍〕釜ノ子ヨリ出デ會津ノ兵ヲ破リテ淺川ノ後方ニ出ヅ、然ルニ三春ノ兵中途ヨリ離反シテ西軍ニ投ジ反撃ス、爲ニ列藩ハ非常ノ苦戰トナリ、辛ウジテ兵ヲ収メ歸ル

三春藩は「十六日ノ事ハ、眞ニ一時ノ錯誤ニ出ヅ」と、裏切りを否定して「巧ミニ列藩ヲ欺キ」、最終的には「公然西軍ヲ引入レ仙臺藩石川大和ノ分隊（氏家兵庫之ヲ率ヰ三春領田村郡仁井田ニ繰込居タリ）ヲ突然襲撃セシ爲メ散々ニ敗

ラレ僅カニ二人辛ウジテ逃歸レリ」という結果をもたらす。「之ヨリ列藩ハ三春ノ不信不義ヲ怒リ三春狐ニ誑カサレタルハ不覺モ亦甚ダシ必ズ彼ヲ屠ラズンバ已マジト切齒セリキ」[72]。

こうした三春藩のありようは、諷刺錦絵にも描かれている。「子供あそびぼんでんまつり」という作品がそれである。一八六八年（慶応四年）五月頃に制作されたと思われるこの非合法出版物のなかで、三春藩は、「はてあつちへ／かへろうかしらん／しかしこちらに／ゐたいものだが」と、旧幕府軍側にいながら新政府軍側への寝返りを考えている子供として描かれている。奈倉哲三は、その描かれ方について次のように解説する。

> 列藩同盟に加盟した陸奥・出羽諸藩のなかで腰の据わっていない藩はいくつかありましたが、三春藩の「動揺」の激しさは他にないほどでした。〔……〕全体に五月上旬の情勢を描いているなかで、三春藩をこのように描いたのは、この時期すでに三春のどっちつかずの姿勢が江戸庶民にも伝わっていたことを意味し、この絵師・板元らは、水戸藩後方で隠れながら様子を窺うように三春を描き、今はこのまま同盟側にいたほうがよさそうだけど、やはり新政府側に戻った方が良いのかなという台詞まで入れることで、三春の動揺している姿を描いたわけです[73]。

条野が、自分の読者たちの少なくとも一部が、こうした記憶を共有していることを期待していたのは、間違いないだろう。小宮家の厩における馬の配置は、その作者が、隆茂を仙台藩、小宮夫妻を「巧ミニ列藩ヲ欺」いた三春藩に見立てていること、もう少し大きな枠組みで言えば、隆茂を旧幕勢力、彼を裏切った人々を新政府勢力と結びつ

けていることを物語っている。条野にとって、『リア王』とは、薩長による討幕クーデターの寓話だったのである。

前節で紹介したように、『三人令嬢』単行本化に際して添えられた序文は、この作品の教育的効果を謳っている。では、具体的にどのような教育的効果が想定されていたのだろう。本文冒頭の一節に従うなら、それは以下のようなものである。

婚姻は男女一代の大禮にして苟くも之れを擧行すべからず平素至孝なる令郎令嬢も一度婚姻を爲すや其良夫其夫人の行狀に依り不孝の子となる者なしとせず父母たる者は注意せずんばあるべからず[74]

つまり、もともと親孝行な子供であっても、配偶者の悪影響で、親不孝者になることもあるから注意せよ、というのである。しかしながら、この警告は、その後に展開される物語とは一致しない。

『三人令嬢』における登場人物の善悪の色分けは非常にはっきりしており、瑠璃子にせよ、佐代子にせよ、その配偶者の悪影響を受けたわけではなく、もともとそういう人物であったとしか思えない。佐代子の夫、義直は、ラム版と同じく殆んど描かれず、瑠璃子の夫、茂樹は、むしろラム版以上に好意的に描かれている。彼は、折に触れて瑠璃子を諌めようとする。「抑々茂樹は素と水島の末家にて幕府の頃ろは禄七千石を食みたる旗本の士なるが維新の際舊領へ土着し茂樹は幼にして出京し或塾に入て英學を修め夫より大學豫備門に入り同門を卒業して英國に渡航しケンブリッチの大學校に入り歸朝の後間もなく職を法官に奉じ思慮分別もある人」[75]なのである。彼は旧幕臣であり、彼なりのやり方で義父にして本家の当主である隆茂への忠義を貫こうとし、それが直接の理由ではないものの、

最後には毒殺されてしまう。

一方で、『三人令嬢』を薩長クーデターの寓話とみなすならば、このいささか的外れな教訓に込められた真意と、茂樹の設定の理由が見えてくる。この教訓は、婚姻という形でジェンダー化されているが、そこで批判されているのは、三春藩のような、徳川家を支えるべき諸藩が、薩長と結託し、「不孝の子」となったことなのではないだろうか。表向き、隆茂は「維新の際抜群の軍功ありとて賞典禄若干を賜」わった、新政府側の功労者とされている。福地の筆禍事件を目の当たりにした条野にすれば、あからさまな政府批判など、新聞紙条例の手前、不可能であった。しかし彼は、「わかる人にはわかる」ディテールを書きこむことで、表面上の設定を転覆させるような読みが可能になる作品を生み出していたのである。

おわりに

『三人令嬢』は、毒婦物から発展した探偵小説のフォーマットを用いて『リア王』を書き換えている、そこで暴かれ、裁かれる悪には新政府の姿が重ねあわされている――本論における『三人令嬢』の読みを簡単にまとめれば、こういうことになるだろう。とは言えそもそも、土谷桃子が「時代の変化に機敏に対応し器用に生きた」[76]と要約する人生を送った条野伝平に、いまさら本気で明治政府を批判する意図があったとも思えない。『三人令嬢』が書かれた一八九〇年（明治二三年）には、すでに大日本帝国憲法も発布されており、新聞連載終了と単行本刊行の間の一一月二九日に施行される。条野自身が身をもって経験した幕末・維新の嵐はもはや遠い過去のものとなり、柳田泉が

「実に不思議なアダプタビリティの持主」[77]と呼んだ人物は、新しい社会に申し分なく適応していた。毒婦物・探偵小説というフォーマットが採用されていること自体が、そのことを雄弁に物語っている。

かつて粋狂連の面々は、本論冒頭で紹介した三題噺や興画合せのほかに、悪摺りという「仲間の失態をすっぱ抜いて刷物にして配るという趣味の悪い楽屋落ち」にも興じていた。[78]『リア王』を薩長クーデターに見立てるというのは、そうした遊び心に満ちた諷刺の延長線上にあったものと考えた方がいいだろう。この見立てが発露・喚起するのは、そういう遊びに明け暮れることのできた旧幕時代へのノスタルジーである。探偵小説という最先端の流行を取り入れて新しい読者への訴求を図りつつ、旧幕以来の古い読者のノスタルジーにも応える――『三人令嬢』は、実にしたたかで豊かなテクストであると言えるのではないだろうか。

＊ 本論は、シンポジウム「時代と文化のはざまのシェイクスピア」（日本英文学会関東支部第一六回大会、二〇一八年一〇月二七日、早稲田大学戸山キャンパス）における口頭発表「採菊散人『三人令嬢』を読む」に、加筆・修正を施したものである。冬木ひろみ氏には、当日、司会の労をおとりいただいた。記して感謝したい。

注

（1）『やまと新聞』一八九〇年七月二九日、第三面。

（2）採菊散人『三人令嬢』鈴木金輔、一八九〇年。同書は国立国会図書館デジタルコレクション（http://dl.ndl.go.jp/）でインターネット閲覧が可能であるほか（国立国会図書館書誌ID 000000511315）、川戸道昭・榊原貴教（編）『シェイクスピア翻訳文学書全集』（全四五巻＋別巻二巻）大空社、一九九九―二〇〇四年の第一二巻にも収録されている。新聞連載と単

行本で、テクストに大きな異同はない。以下本論では、同作からの引用は、読者の便宜を考慮して単行本からとし、明らかな誤植は、新聞連載を参照し、修正のうえ引用する。

(3) 土谷桃子『江戸と明治を生きた戯作者—山々亭有人・条野採菊散人』近代文芸社、二〇〇九年、四一—五一頁。

(4) 野崎左文『かな反古』假名垣文三、一八九五年、五三頁。この魯文追悼評伝には、条野が序文を寄せている（採菊散人「假名反古叙」）。

(5) 森田健司『明治維新という幻想—暴虐の限りを尽くした新政府軍の実像』（歴史新書六七）洋泉社、二〇一六年、二一頁。

(6) 江戸庶民にとっての寛永寺の位置づけおよび上野戦争に対する感情については、奈倉哲三「「上野のお山」をめぐる官軍と江戸庶民の攻防」（奈倉哲三・保谷徹・箱石大（編）『戊辰戦争の新視点』下巻、吉川弘文館、二〇一八年）一二八—三〇頁および一三九—四一頁を参照せよ。

(7) 横山百合子『江戸東京の明治維新』（岩波新書（新赤版）一七三四）岩波書店、二〇一八年、二六頁。

(8) 前掲書、七八頁。

(9) 大久保利通『大久保利通文書』（全一〇巻）日本史籍協會、一九二七—二九年、第三巻一六一—六二頁。

(10) 奈倉哲三『諷刺眼維新変革—民衆は天皇をどう見ていたか』校倉書房、二〇〇四年、一〇九—一五頁、二四六—五九頁、四三八—四八頁。奈倉哲三の以下の著作も参照。「ことわざから戊辰戦争をみれば」（日本ことわざ学会（編）『ことわざに聞く—その魅力と威力』人間の科学新社、二〇一〇年）五九—八一頁。「戊辰戦争下「見立ていろはたとへ」の概要」（『国文学—解釈と鑑賞』第七四巻第一二号、二〇〇九年）九四—一一一頁。「戊辰戦争期諷刺史料の歴史的意味」（箱石大（編）『戊辰戦争の史料学』勉誠出版、二〇一三年）二三三—六六頁。

(11) 奈倉哲三『絵解き幕末風刺画と天皇』柏書房、二〇〇七年を参照。「当世三筋のたのしみ」は、同書四二—四七頁に収録・解説されている。森田　前掲書、三八—四三頁および横山　前掲書、i—vi頁も参照。

(12) 明治文化研究会（編）『幕末明治新聞全集』（全六巻＋別巻）世界文庫、一九六一—六二年、第六巻下巻四六〇頁。

(13) 佐々木亨「所謂「著作道書キ上ゲ」を巡って—魯文の転身」（『日本文学』第五六巻第一〇号、二〇〇七年）三四頁。

(14) 土谷　前掲書、一一〇—四四頁。

(15) 櫻癡居士「新聞紙實歴」（福地源一郎『懐往事談—附新聞紙實歴』民友社、一八九四年）一九八—九九頁。
(16) 土谷　前掲書、五六頁。
(17) 櫻癡居士　前掲書、二〇〇頁。
(18) 川邊眞藏『福地櫻痴』三省堂、一九四二年、八四—八五頁。丹羽みさと「山々亭有人『流行英語都々逸』の周辺」（『立教大学日本文学』第一〇五号、二〇一〇年）一四九頁も参照。
(19) 川邊　前掲書、八五頁。櫻癡居士　前掲書、二〇九—一〇頁も参照。
(20) 毎日新聞百年史刊行委員会（編）『毎日新聞百年史』毎日新聞社、一九七二年、一頁。
(21) 西田菫坡「三十三年前日報社創立談」（『東京日日新聞』一九〇四年一一月一〇日）第一一面。
(22) 櫻癡居士　前掲書、二〇六頁。「藤岡」は「廣岡」の誤植か？
(23) 野崎左文『私の見た明治文壇』春陽堂、一九二七年、七頁。
(24) 紙面の表記に従い、本紙は『東京日日新聞』、錦絵版は『東京日々新聞』とする。
(25) 千葉市美術館（編）『文明開化の錦絵新聞—東京日々新聞・郵便報知新聞全作品』国書刊行会、二〇〇八年、一二頁。
(26) 富澤達三「時事錦絵としての「錦絵新聞」—錦絵版『東京日々新聞』『郵便報知新聞』をめぐって」（前掲書）六—七頁。土屋礼子『大衆紙の源流—明治期小新聞の研究』世界思想社、二〇〇二年、八三—八五頁も参照。
(27) 篠田鑛造『明治百話』四條書房、一九三一年、二五〇頁。篠田が言及している一枚絵とは、小林清親の「東京銀坐街日報社」（一八七六）と思われる。この絵画は、東京国立博物館研究情報アーカイブズ（http://webarchives.tnm.jp/）の「画像検索」で閲覧できる（画像番号 C0006617）。
(28) 前掲書、二五〇—五一頁。「尤もこの「やまと」の時、芳幾は歌舞伎新報へ全力を打込むので、「やまと」は挿畫を芳年〔＝月岡芳年〕と年方〔＝水野年方〕とが擔當でした、年方はここで採菊道人の條野に仕込まれ、叱られながら修業を積んだ譯です」（篠田鑛造『明治開化綺談—續篇「明治百話」』明正堂、一九四三年、二八七頁）。なお、この時、「條野伝平が『東京日日』と完全に無関係となり、独立して全く新規に始めたのかと言えば、それにも疑問が残る」（土屋　前掲書、二五六頁）。「『警察新報』も『東京日日新聞』の印刷所で印刷されていた。印刷設備の共用のみならず、両社社員の境界線も判然としていなかったらしい」（土谷　前掲書、六一頁）。一八九〇年（明治二三年）一月二二日に日報社に入社した岡本

綺堂は、「取分けて條野採菊老人（鏑木清方君のお父さん）はわたしを可愛がつて色々のことを教へてくれた。これはやまと新聞が東京日日新聞の出店のやうな關係になつてゐた爲でもあつた」と回顧している（『明治劇談 ランプの下にて』岡倉書房、一九三五年、一三六頁）。

(29) 野崎『私の見た明治文壇』、七頁。

(30) 無署名「やまと新聞發行の開序」（『やまと新聞』一八八六年一〇月七日）第一面。

(31) 篠田『明治開化綺談』、二七三頁。

(32) 土屋　前掲書、二五八—五九頁。

(33) 土谷　前掲書、一五五—五八頁。

(34) 吉田香雨『當世作者評判記』大華堂、一八九一年、四四—四五頁。

(35) 條野傳平『痘痕傳七郎』博文舘、一八九三年、頁数なし。『花の深山木』／『痘痕伝七郎』については、土谷　前掲書、一七九—八三頁、および平辰彦の以下のふたつの論文を参照。「講談化された『オセロウ』の研究—その受容の嚆矢をめぐって」（『演劇学』第三三号、一九九二年）二二—三四頁。「翻案講談『オセロー』と新聞小説『痘痕伝七郎』—近代日本における〈舌耕芸〉の読みをめぐって」（『論叢』（秋田経済法科大学短期大学部）第七四号、二〇〇四年）一—三〇頁。

(36) 後注50および51参照。『花の深山木』／『痘痕伝七郎』について平は、ラムを種本としつつ、「卜書のある原作本の翻訳か注釈書が参照された可能性」を示唆している（『翻案講談『オセロー』と新聞小説『痘痕伝七郎』」、六頁）。

(37) 土谷　前掲書、一二〇—二三頁、および丹羽　前掲書、一四七—四八頁。

(38) 鏑木清方「條野採菊翁」（『東京日日新聞』一九〇九年三月二九日）第九面。

(39) 土谷　前掲書、一八九—九三頁。ただしこの時期にはすでにラムの「リア王」の翻訳が二種類（チャールス・ラム『セキスピヤ物語』品田太吉（訳）、品田太吉、一八八六年、およびチャーレス・ラム『シェキスピーヤ筋書 一名 西洋歌舞伎』竹内余所次郎（訳）、博聞社、一八八六年）出版されており、それらを参照した可能性もないわけではない。

(40) 土谷　前掲書、二三六頁。

(41) Charles Lamb and Mary Lamb, *Tales from Shakespeare*, Penguin Books, 2007, p.108.

(42) 採菊散人　前掲書、一頁。

(43) 前掲書、一―二頁。
(44) 前掲書、二―三頁。
(45) Lamb and Lamb, *op. cit.*, p.113.
(46) 採菊散人　前掲書、二九頁。
(47) ラム版では、ケント伯がフランスに赴き、リアの窮状を直接コーディリアに伝える― 'himself embarking for France, [the earl of Kent] hastened to the court of Cordelia, and did there in such moving terms represent the pitiful condition of her royal father, and set out in such lively colours the inhumanity of her sisters' (Lamb and Lamb, *op. cit.*, p.119)。また、本文中に引用した手紙で語られているように、遠藤に水島伯爵の冷遇を伝えるのも宗入である。
(48) 採菊散人　前掲書、一三五―三六頁。
(49) Lamb and Lamb, *op. cit.*, p.120.
(50) 採菊散人　前掲書、一六三頁。土谷は、「『リア王』で姉達の浮気相手であるエドマンドは妾腹で、正腹の異母兄弟エドガーと父グロスター伯爵に暗い感情を持っており、それが彼の行動の底流にある。登場場面も作品全体に及び、重要な役割を演じている。それに対して『三人令嬢』の片山冬三は、全四九回の連載中第三七回から唐突に登場し、ただの女好きな色男として描かれる」と述べている（土谷　前掲書、一七一頁）。土谷は『三人令嬢』をシェイクスピアの『リア王』と比較しているわけだが、この段階でエドマンドに相当する人物が唐突に登場することこそが、この作品がラム版に基づくものであることの決定的証拠と考える方が妥当だろう。彼の造形が、'Edmund [……], who by his treacheries had succeeded in disinheriting his brother Edgar the lawful heir from his earldom, and by his wicked practices was now earl himself' (Lamb and Lamb, *op. cit.*, p.120) というラムの記述に依拠していることは明らかである。
(51) ラム版では、サブプロットが削除されているために、コーンウォール公はこのタイミングでたまたま死ぬ― 'It falling out that the duke of Cornwall, Regan's husband, died' (Lamb and Lamb, *op. cit.*, p.120)。前注参照。
(52) 採菊散人　前掲書、二〇〇頁。
(53) 前掲書、二〇〇―〇一頁。
(54) 前掲書、二〇一頁。

(55) 前掲書、二五二頁。『三人令嬢』単行本の頁数には乱れがあり、二〇一頁の次が二五二頁となっている。引用の頁数は、印刷されたとおりに従っている。

(56) 前掲書、二六一頁。

(57) Lamb and Lamb, *op. cit.*, pp.121-22. こうした書き換えは、このあと日本の英語教育に継承される。内丸公平「シェイクスピアと英語教育—中等学校用英語教科書（1886年—2016年）におけるシェイクスピア受容の考察」（『日本英語教育史研究』第三三号、二〇一八年）三六頁。

(58) 採菊散人　前掲書、二七二頁。

(59) 無署名の「理想佳人傳（第壱章）シエクスピア理想 コルデリアの傳」（『女學雑誌』第四八号、一八八七年）は、初回で愛情テストの直前までを描いただけで終わる。同じく無署名の「三人の姫」は、「第一段」（ケントの諫言まで、『女學雑誌』第七三号、一八八七年）、「第二段」（カイアスに変装したケントがリアに仕えるまで、第七四号、一八八七年）、「第三段」（リアがリーガンの城に到着してゴネリル、リーガンと対峙するまで、第七五号、一八八七年）、と続いたあと、「第四段」でリアが雨のなかへ飛び出し、ゴネリルとリーガンが顔を見合せて微笑むまでを描いて中絶している（第七六号、一八八七年）。

(60) 永昌「三人令嬢序」（採菊散人　前掲書）、頁数なし。

(61) 奥武則『スキャンダルの明治—国民を創るためのレッスン』（ちくま新書九五）筑摩書房、一九九七年、七六—七七頁。

(62) 千葉市美術館（編）　前掲書、二二頁。奥　前掲書、六九—七二頁も参照。

(63) 千葉市美術館（編）　前掲書、二六頁。

(64) 前掲書、一〇六頁。

(65) 堀啓子『日本ミステリー小説史—黒岩涙香から松本清張へ』（中公新書二二八五）中央公論新社、二〇一四年、七〇—七一頁。小松史生子「ロマンの源流—明治期探偵小説の萌芽と挑戦」（押野武志・谷口基・横濱雄二・諸岡卓真（編）『日本探偵小説を知る—一五〇年の愉楽』北海道大学出版会、二〇一八年）一〇頁も参照。

(66) 『やまと新聞』一八八六年一〇月七日、第二面。

(67) 江戸川亂歩「日本探偵小説の系譜」（『中央公論』第七四一号、一九五〇年）一七三頁。伊藤秀雄『明治の探偵小説』晶

文社、一九八六年、四二―四五頁、および中島河太郎『日本推理小説史』（全三巻）東京創元社、一九九三―九六年、第一巻三三―三六頁も参照。

（68）柳田泉『續随筆明治文學』春秋社、一九三八年、二八七―八八頁。

（69）採菊「三遊亭圓朝の傳」（『新小説』第二期第五年第一一巻、一九〇〇年）一六六頁。

（70）採菊散人　前掲書、六九頁。

（71）前掲書、七二―七三頁。

（72）藤原相之助『仙臺戊辰史』新井活版製造所、一九一一年、六一五―一七頁。

（73）奈倉『絵解き 幕末風刺画と天皇』、一六四頁。ほかに三春藩が描きこまれた作品として、「子供遊うでッくらべ」（一二四―二七頁）および「むつの花子供の戯」（二三四―四〇頁）も参照。

（74）採菊散人　前掲書、一頁。

（75）前掲書、九一頁。

（76）土谷　前掲書、二三〇頁。

（77）柳田泉『明治初期翻訳文学の研究』（明治文学研究第五巻）春秋社、一九六一年、二一〇頁。

（78）土谷　前掲書、四五頁。